建築家アルヴァ・アールトの建築遺産保護の現状に関する考察

フィンランドにおける二十世紀建築遺産保存に関する研究 その1

THE SITUATION OF CONSERVATION OF ALVAR AALTO'S
ARCHITECTURAL HERITAGE

A study of protection of twentieth century architectural heritage in Finland part I

堀内 絢子*

Ayako HORIUCHI

Protection of twentieth century architectural heritage is recent world wide concern. This paper concerns the cases in Finland, one of the leading countries in this matter, and especially the heritage of Alvar Aalto, the architect. First, this article introduces the interest for twentieth century heritage in Finland. Second, it researches for the conservation of Alvar Aalto's heritage in the Finnish architectural review "Arkkitiehti". So the paper covers also the activity of Alvar Aalto Foundation, the practical cases of restoration of Finlandia Hall, one of his masterpieces and also international project of restoration of Library of Viipuri, Russia.

Keywords: *Alvar Aalto Foundation, Twentieth Century Architectural Heritage, Conservation, Finland, Finlandia Hall, Viipuri Municipal Library*

アルヴァ・アールト財団, 二十世紀建築遺産, 保存, フィンランド,
フィンランディアホール, ヴィープリ市立図書館

1. はじめに

二十世紀建築遺産^{注1)}の保存に関しては、近年さまざまなアプローチにより論じられている。世界的な傾向としては、1992年に採択された欧州評議会 (Council of Europe) の建築遺産保護憲章に続く、「二十世紀建築の保存に関する勧告^{注2)}」が嚆矢といえる。また、1994年にユネスコ世界遺産委員会が採択した「均衡性のある、代表的な信用できる世界遺産リストへグローバルストラテジー」^{注3)}では近代の遺産保護・啓蒙を推進しているほか、28件の近代の遺産が世界文化遺産リストに登録されている¹⁾。また、1995年のICOMOS (国際記念物遺跡会議) によるモンテリオール行動計画や、DOCOMOMO等のNGOによる各国支部の势力的な啓蒙活動が成果を挙げている。

日本でも丹下健三の広島平和記念館などが国の重要文化財の指定を受けたことをはじめ、今後一層この分野の遺産が増加することが見込まれる。

フィンランドは、1950年代にアルヴァ・アールトの最初期の作品マンムラという彼の両親の家が都市計画道路による撤去を要求されたとき、反対運動が起こったこと^{注4)}などから、比較的早い時期から二十世紀建築遺産に対し保存や歴史的な重要性について関心を持ってきた国である。また、現在フィンランドの文化財行政は、戦後に計画された建築、都市計画などを重点的な保護の対象として扱っている。

更にフィンランドは、1995年のICOMOSによる二十世紀建築遺産

に関するセミナー、2001年の戦後建築の保存に関する国際会議をそれぞれホストし、当時の二十世紀建築保存の方向付けに貢献した。さらに ICCROM (国際文化財修復センター) による近代建築保存修復のセミナー (MARC) を1999年、2002年、2006年に開催しており (2010年に次のセミナーが予定されている)、二十世紀建築保存に関わる実務者を養成することにも力を入れている。

このように同国は二十世紀建築遺産保存に関する様々な活動を主導していることから、同遺産保護の国際的な世論形成のために大きな役割を果たしてきている国の一つであるといえる。

本論文は、フィンランドにおける二十世紀建築遺産の扱いを考察し、実例の検証のためフィンランドの建築雑誌 Arkkitiehti よりアルヴァ・アールトの建築遺産の保護・修復に関する記事を抽出し、それに見られる傾向を検証する。そしてアールトの建築遺産の実務に携わるアルヴァ・アールト財団の活動及び現在行われている修復事例を紹介し、考察を加える。

2. フィンランド文化財行政における二十世紀建築遺産の位置づけ

フィンランドの文化財行政では、二十世紀建築遺産は重要な文化遺産の一つのカテゴリとして確立している。

そのことを示すのが2001年に内閣承認された、フィンランド政府発行の建築遺産政策^{注5)}である。これは建築遺産を職掌する省のひとつ、環境省の地域振興部門が国家的な建造物遺産に対する活動プログラムを策定する目的で製作したもので、環境省と教育省

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程
世界文化遺産学専攻 修士 (世界遺産学)

Ph. D. Candidate, Doctorial Program in World Cultural Heritage Studies, Univ. of Tsukuba

(包括的な遺産を所管する、考古局 Museovirasto/National Board of Antiquities を外局として有する)の連名で発行された。

この政策によると、フィンランドの建築文化は他のヨーロッパの国々に比べると歴史が浅く、1921 年以前の建築は全国で大体 15 万棟、それは現存する建築のおよそ 5%で^{注 6)}、1921 年から 1950 年の間はおよそ 10%、第二次世界大戦後に完成した建築が 80%を占めている。

政策でいう遺産のうち、二十世紀建築遺産の一つは、1950 年代から 1960 年代にかけて行われた官公庁・商業地区を集積した中心街区及び道路網の整備事業や、石造アパート、木造住宅街等の開発を伴い形成された都市である^{注 7)}。

また、いわゆる近現代建築は、Moderni Rakennusperintö/Modern Built Heritage)という遺産の分野として確立している^{注 8)}。

政策中に明記されていることだが、フィンランドは 1917 年にロシアから独立したという比較的若い国家であるため、二十世紀初頭の建築文化は、ナショナリズムの表現の一環でもあった。そのため、二十世紀建築遺産は重要な国家的文化として賞賛され、国家のアイデンティティの構築に役買ったものであると位置づけられている。

また同時期に建築された、工業・軍事・行政施設、居住区などは近代社会的機能を有し、フィンランドの発展にとって重要な遺産であると明確にされている。

1930 年代後半、フィンランド人の建築家は様式の模索の結果、独特な建築文化を確立する。また、第二次世界大戦後、フィンランドは、領土の割譲に伴い、40 万人の難民の受け入れのために多量の住宅供給を必要とした。これらの建築も現在重要な二十世紀建築遺産である^{注 9)}。

その他にも二十世紀の新技术を象徴するものとして、1960 年代から 1970 年代に始まった工業規格による木材製品、プレファブ、鉄筋コンクリートを使用した建築も、建築史上の重要な建築遺産としての価値が明確に認識されている。

以上のように、フィンランドの文化財行政において、二十世紀建築遺産は遺産の一分野として確立している。

3. アルヴァ・アールの建築遺産保護とアルヴァ・アール財団

アルヴァ・アールは、二十世紀フィンランドを代表する建築家である。1898 年 2 月 3 日にフィンランド内陸西部のクオルタネにおいて誕生、1976 年 5 月 11 日にヘルシンキで亡くなっている。1943 年から 1958 年の間フィンランド建築家協会 (SAFA) の議長、1963 年から 68 年の間はフィンランドアカデミーの会長をそれぞれ務めた。²⁾

代表作はパイミオ結核療養所 (1928 年計画、1932 年第一期完成)、ヴィープリ市立図書館 (1928 年計画、1935 年完成)、ヴィラ・マイレア (1938 年)、セイナツァロの役場 (1950 年計画、1952 年完成)、フィンランディアホール (1962 年計画、1971 年第一期完成)などがあげられる。現在、フィンランド国内にはおよそ 260 のアールによる建築がある。^{注 10)}

また、Docomomo フィンランドにより作成された同国を代表する建築 69 件のうち 18 件がアールの建築である。

アルヴァ・アール財団 (以下財団)は 1968 年にアールの図面

資料、写真、絵画等のアーカイブの保存、管理と家具の製造、販売を行っていたアルテック (Artek) 社からの著作権収入を管理するために設立された。もっとも収入が多かったためではなく、彼の思想と知識を、正確に継承するため^{注 11)}で、アール自身自身の精神を遺産とし管理することを主な目的として設立された。アールは常に新しい可能性への試みを肯定していたため、財団はアール・アカデミーという若い建築家、デザイナーのためのワークショップを開催している。

アール家はすべてのアールの図面、絵などを財団に小額で売却した。それら資料のアーカイブ化事業は 1980 年代の後半に始まり、マイクロフィッシュ、デジタル化された。元の図面は全て複製しておくことで、1920 年代からの脆弱な紙が直接手に触れたり、日光に当たることのないようにし、これらは処理後、ユヴァスキュラにある文書保管庫に送られている。

財団の所有するアール建築は、アール自邸とアトリエ、アール博物館、そして実験住宅である。

財団の意思決定をする委員会は常に二名のアールの家族が参加している。その他は銀行家、ヘルシンキ工科大学の建築家、フィンランドアカデミー、アルテック役員、ユヴァスキュラ市からそれぞれ一名ずつ委員となる。任期はおおよそ 2 年から 4 年、新しい委員はその他の委員からの推薦によって選ばれる^{注 12)}。財団には現在 28 名の職員がおり、その内二人は建築家である。財団は政府から一切の恒久的な支援を受けていない。

ヘルシンキより北西にあるユヴァスキュラ市にあるアール博物館は 1973 年に開館した。1998 年に財団に統合されるまでユヴァスキュラ市により所有された博物館であったため、アール博物館の職員はユヴァスキュラ市職員に準じて扱われる。

財団にある建築遺産部門の業務は全てのアール作品の保護と監視を行うことである。これはフィンランド建築博物館、考古局と共同で行っている。財団により所有されている建築物にのみ、建築遺産部門の建築家が修復計画設計の実務者となる。その他の作品に対して行われる修復工事等に対しては、設計に関する委員会等に参加し助言や資料提供を行う。

財団の会員は、スウェーデン、ドイツ、フランスなど様々な国に分布している。また、ル=コルビュジェ財団^{注 13)}やミース財団^{注 14)}などと活発な交流がある。そして ICAM^{注 15)}、ICOM^{注 16)}や DOCOMOMO との関係も非常に良好である。また、ICCROM の近代建築保存実務のトレーニングコースには、アール財団が非常に貢献している。

4. 建築雑誌におけるアールの建築遺産の取り扱い

アールの建築遺産が実際どのように認識されているかを調べるため、SAFA が発行している建築雑誌 Arkkitehti^{注 17)}の 1952 年から 2004 年まで^{注 18)}のバックナンバーを悉皆的に調査し、事例を収集した^{表 1)}。Arkkitehti 誌において取り扱われた 313 件の二十世紀建築遺産の保存修復に関する記事のうち、19 件がアール建築遺産に関するものであった。

本節では、記事の一部を紹介し、アールの建築遺産がどのように扱われてきたかを考察する。

アールの建築遺産が“保護”対象として Arkkitehti に登場するのは、存命中の 1967 年のことである。この記事では特にアール

表1 Arkkitehti におけるアールト遺産の保存修復に関する記事一覧

年	号	著 者	記 事
1967	7 - 8号	Moholy-Nagy, Sibyl	Modernin arkkitehtuurin vanhehminen
1971	3号	Kairamo, Maija	Restauroimisen periaatteista.
1977	7号	Maima, Norri	Kuinka Kay paimion parantolan?
1979	2号	Kairamo, Maija	Tuhoammeko Alvar Aallon perinnön?
1980	2号	Komonen, Markku	Funkionalismin alennusmyytti
1983	2号	編集部	Villa Mairea tänään, Noormarkku
1986	4号	Saari, Touko	Etelä-Pohjanmaan Maakuntasäätiön talo. Etelä-Pohjanmaan suojeluskuntapiiriin talon entistäminen ja peruskorjaus, Seinäjoki.
1991	4号	編集部	Viipurin kirjaston restaurointi.
1992	7号	Kareoja, Pentti	Siunaa ja varjele.
1998	5号	Laaksonen, Esa	Maailmanperintölistan kärkisijoilta.
1998	5号	Heikinheimo, Marianna	Viipurin kirjasto - maailman edistyskellisin kaupunginkirjasto.
1999	4号	記名なし	Aallon bienaalipavilionin suojeltin italiassa
1999	5号	記名なし	Aallon toppilan tehdas
2000	2号	Neuvonen, Pentti	Viipurin rakennusperintö tänään.
2001	5号	Kairamo, Maija; Sippo, Hanni	Aalto täältä ikuisuuteen.
2003	6号	Maunula, Juhani	Punatiiliset pihapiirit
2003	5号	Kairamo, Maija	Kahden kansan kirjasto.
2003	5号	Mustonen, Tapani	Kotien koti.
2003	5号	Mustonen, Tapani	Paperitehtaan koulu.

トの初期作品、1920年代から1930年代の建築を取り上げ、これらは建築後およそ30年～40年が経過し、歴史的価値に保証された十分に重要な遺産であると述べられている^{注19)}。

1971年には、保存概念の基本を解説するなかで、既存の遺産の他に新しいものに対する価値評価の対象として1940年代までの新しい建築、特にパイミオ結核療養所を事例としてあげている^{注20)}。1977年にはパイミオ結核療養所の改修工事に際し、アールトがデザインした家具などが廃棄されている状況を報じ、病室の博物館的な価値の保存を提案している。

1979年はアールトの遺産を破壊しているのではないかとという題の記事が掲載された^{注21)}。本記事はアールト建築の認知度に比して、遺産としての扱いが少なく、彼の死後、残すべき作品が選別されていると述べ、機能的・実用的な建築のため、現在必要とされる実際の運用のために、改造されてしまうこともあると述べられた。

1983年2号では、「今日のヴィラ・マイレア」としてその改修、マイレア財団とその活動の記事が掲載された^{注22)}。マイレア財団

表2 建造物保護法下にあるアールト建築遺産

(2004年までのArkki tehti誌に基づく)

所在	作品名		制作年
Alajärvi	Villa Vainölä	ヴィラ・ヴァイノラ	1926
Helsinki	Aalon oma koti ja toimisto	アールト自邸とアトリエ	1936-1956
Jyväskylä	Työväenyhdistyksen talo	労働者会館	1925
Helsinki	Finlandia-talo	フィンランディアホール	1962
Helsinki	Kulttuuritalo	文化会館	1958
Helsinki	Rautatalo	ラウタビル	1955
Jyväskylä	Nuoran talo	ヌオランタロ	1923
Jyväskylä	Valtiontalo, ent. Suojeluskunnan talo	自衛団ビル	1926-29
Jyväskylä	Jyväskylän uimahalli	水泳場	1966

とは、マイレア邸と芸術コレクションの維持管理を行う財団である。1981年以降、マイレア邸はオールストロム社の所有となった。財団はオールストロム社と協力して管理をする。

1986年4号では、セイナヨキにある、南ボスニアの自衛団の修復が事例として取り上げられた^{注23)}。これはアールトの初期、1924年の計画である。ヨーラン・シルツ^{注24)}は、アールトの初期作品のうちほとんど無傷である最も重要な建築の一つであると評価した。庭も当初のままであり、修復工事は1982年に開始された。

1991年4号、ヴィープリ市立図書館の修復に関する記事が掲載された^{注25)}。1935年に完成したアールトの代表作の一つであるヴィープリの図書館の修復が国際的な保存キャンペーンとなったことを報じる記事で、

修復の概要、目的とフィンランドとロシアの協力体制が報告された。そしてこの計画は“新しい文化的事業の例”であると述べられている。ヴィープリ市立図書館に関しては、その後も断続的に記事が掲載されている^{注26)}。

2001年5号において、アールトの遺産保存、修復に関する総合的な記事が掲載された^{注27)}。この記事では、1920年代、1930年代のフィンランドの建築家はフィンランドの国家的アイデンティティの表現に強力な転換点を与えたと述べ、特に代表であるアールトの社会的コンセプトと新技術による建築作品は、彼に建築家のリーダーとしての地位を与えたと評価している。また、彼の遺産は現在保存修復を行う際、非常に挑戦的であったとした。アールト建築遺産は現在公私問わず様々な個人、団体により所有され、各々異なるレベルで保護されている。現在アールト建築遺産は、今までで最も活発に修復工事が行われているものの、フィンランドでは、建築全体に大きな影響を与えるとしても、些少な変更・修理には建築許可が不要なため、アールト建築遺産の真正性が無秩序な修復によって脅威にさらされている。

この記事によれば、2004年までにアールト建築遺産で建造物保護法^{注28)}により保護されているものは表2の通りである。これらの他、アールトの後期の代表作で、完成まで非常に長い時間を費やしたユヴァスキュラ大学施設は政府所有のため、公有の建物の保護に関する法律^{注29)}により保護されている他、少なくともおよそ40の様々なサイトが市町村レベルでの都市計画の下で保護されているという³⁾。

以上に見られるように、Arkki tehti におけるアールトの遺産の取り扱い、修復事業の

実例そのものを取り上げるのではなく、論文やコラムで保存を要求するものや、行われた修復、あるいは企画等に対して独自の意見を述べるという、第三者的で、批評的な傾向が強いといえる。

5. アールト建築遺産保存修復の実例

前節で示したように、建築雑誌で取り扱われるほどアールト建築遺産は保護・修復の対象となっている。では、実際どのような過程で修復計画が進められ、それらにアールト財団などがどのように関わってきたのかを検証する。

取り上げる実例は二つ、まずは劣化しやすい材料と真正性に関する問題で話題となることもあるフィンランディアホール。そして二十世紀建築遺産と国際協力、技術援助など様々な要素が修復計画に関わってくるヴィープリ市立図書館である。

i. フィンランディアホール

フィンランディアホールは、ヘルシンキ中心部、トーロ湾沿いにある国際会議場兼コンサートホールである。1962年に設計され、1967年から1971年にかけてホール部分が建築された後、1973年から1975年にかけて会議場部分が増築された。⁴⁾

このホールはその造形的な美しさに反して、さまざまな問題を当初から抱えていた。第一が大ホールの音響である。音響に関しては早い段階でホール内に音響装置を組み込むことで問題は解消した。

もう一つの大きな問題が外装材料に関するものである。アールトは外装材料に白いイタリア製のカラーラ大理石を選んだが、それらはフィンランドの過酷な気候に耐えられず、一枚ずつ反り返ってしまったり、剥落したりしたのだ。

この外壁の取替えのためにヘルシンキ市当局は1980年から工事予算の計上を開始した。まずは現状調査がされ、1986年から実際の工事の検討が始まった。この時点で取替え材料の候補としてあげられたのは、明るい色の花崗岩か、結晶片岩 **Quartozschist** (か) のどちらかであった。大理石が10年から20年しか持たない一方、花崗岩はフィンランドの気候に対して耐性が強いのである。

1988年に修理事業のタイムテーブルが作られ、修理工事は1990年に始められることが決定され、国立技術調査センターVTTが色調や耐性等の面で目的にかなう花崗岩を選定するため、28種の花崗岩が試された。

この試験の結果、1991年に、ヘルシンキ市当局の公共工事局以下PWD・Public Works Department)は、Bethel Whiteというイタリア製花崗岩を採用した設計の建築許可が1月に出された。

このBethel Whiteの採用に関しては、当時存命であったエリサ・アールト^{注30)}が、アールト自身がフィンランディアホールにその石を使う意図があったことを認めたほか、以前アールト建築事務所にいた建築家、パーヴォ・マンツリらもその白さのため、採用に対して肯定的であった。

しかし、アールト学会 The Alvar Aalto Club)がこの決定に反対し、真正性を維持するため、カラーラ大理石の使用による修復を求める署名を集めはじめると、E・アールトとマンツリの二人も考えを変え、カラーラ大理石を第一候補とし、Bethel Whiteはあくまでも許容範囲の材料であると同調した。

しかし1992年の3月の終わりに市議会は、大理石ではなく、灰色の花崗岩を使用するという最終決定を下した。

決定が下った時点で、E・アールトが外壁の材料を変更することは、アールトの著作権の侵害であると異議を申し立てた。その他多くの建築家や専門家も当初のカラーラ大理石の使用を支持した。

この流れは国際建築家連盟UIAによる声明にも見ることができる。UIAの声明は、フィンランディアホールは地方自治体による保存措置がとられるべきで、修理は当初の大理石以外では許容できないというものであった。

1992年の12月、PWDはBethel Whiteを選び、市議会はそれ以上の異議を認めず、事態は収拾するかに見えた。

しかし、1993年、ヘルシンキ市が位置する、ウーシマー州知事のエヴァ＝リーッタ・シートネンがフィンランディアホールは保護建造物であり、その外壁の修復はカラーラ大理石で行う以外ないと声明を出した。

一方で市議会はその決定を無視しようとしたが、1993年5月には国会において、国レベルの保護建造物であることが支持され、フィンランディアホールのファサードの修理はオリジナルの材料であるカラーラ大理石によることが考古局により指導された。

そして1997年の6月2日に、市議会は12対3で、ファサードの素材を当初と同じ白いカラーラ大理石と決定し、修復工事を行った^{注31)}。

フィンランディアホールの修復事業及び材料の取り扱いに関して、前節で取り上げたArkkittehti誌は、論争が行われている時点においてはほとんど記事としては取り上げず、コラムにおいて若干言及した程度であった。

現在、この修復からおおよそ10年が経過し、フィンランディアホールの外壁は再び反り始めている^{図1)}。しかし、本建築遺産はすでに国家的な保護下にあるため、次に行われるであろう修復についても考古局の意向が反映される。

アールトはカラーラ大理石を外装材料に使用することを好んだため、フィンランディアホールの外壁と同様の問題が、2007年から2008年に外壁の張替え工事を行った、エンソグートツァイト社本ビルにおいてもおこった。しかし、フィンランディアホール同様、保護建造物となったことで、当初のカラーラ大理石による修復が行われた。

図1 フィンランディアホールの外壁現状 2007年8月著者撮影)

ii. ヴィープリ市立図書館

ヴィープリ^{注 32)}市立図書館は、アールトの初期の傑作でかつ代表作で、建築家として世界に知られるきっかけとなった作品の一つである。

図書館にはいくつか設計案があり、設計競技の入選案である 1927 年の古典主義のモチーフを有した案では建築されず、1933 年に新しく設計され直した機能主義による案で建築された。完成は 1935 年である。

この図書館は、第二次世界大戦中の砲火で完全に破壊されたと思われていた^{注 33)}。しかし実際の戦場はここより少し離れた場所であったため、戦争によるダメージは少ない。戦後 10 年のあいだ放置された結果、家具・建具、その他の設備が略奪されたことによる被害のほうが甚大であった。

1954 年にヴィボルグ市当局はこの図書館の修復を決定し、1955 年に工事が開始された。この工事期間中、市当局はフィンランドからアールトによる設計図書の写しや、天窓に使用するための丸ガラス、空調機器の交換部品のなどが入手できるようモスクワにある文化省に要請したものの許可が下りず、当時現地で手に入れることのできる限りの材料と範囲で修理が行われた。オリジナルの図書館の窓に合う板ガラスが当時ソヴィエト連邦下では生産されていなかったため、20 センチほど、講義室の窓は低められたことで、50 年代に行われた修復後の図書館のファサードの比例や、材料は当初のものと大いに異なる。

ヴィープリ市立図書館が現存していることが世界に明らかにされ、1992 年の春に、アールト学会とフィンランド環境省による図書館を救うための国際キャンペーンが開始された。そして E・アールトとフィンランド環境省の主導の下、修復のためのフィンランド＝ロシア委員会が設置され、事業のための基金設立が開始された。この修復委員会では、フィンランド人が計画を立て、ロシア側が労働者と材料を提供するという合意形成がされた。この委員会は、ロシアのみで修復に必要な資料や技術、そして十分な資金を得ることが難しいこと、ヴィープリ市立図書館がフィンランドにとっても、アールトの重要な建築遺産であり、価値が認識されていることから成立に至ったと考えられる。

ヴィープリ市立図書館で問題になっていることは、ソヴィエト連邦時代に行われた修復が、すでに再び修復を必要としていること、また、図書館が公園の中心に立っており、基礎に常に水が流れ込む状態であることである。

修復事業の戦略は建物の安定と、将来の腐食を防ぎ、基本的な技術的設備を新しくすること、そして当初の建築の姿に修復することである。この修復事業が行われている間、建物は市立図書館として継続的に使われる。これらの修復設計に関して、アルヴァ・アールト財団の建築家は総合的な設計監修を行う。

修復にかかる資金集めのため、1993 年に設立された INTERNATIONAL COMMITTEE OF THE FRIENDS OF THE VIIPURI LIBRARY 2000 という世界中の建築家を主とした国際支援委員会が発足し、個人や団体などによる募金活動を行っている。⁵⁾

その他の資金集めの活動として 1994 年から開始されたヴィープリ市立図書館の可動展示の国際ツアーがある。この可動展示はミラノ、チューリヒ、東京、ストックホルム、シカゴ、パリ、ロン

ドン、レイキャビクなど各国を巡回している。また、1999 年には、ゲティー財団による支援で、図書館のコンクリート構造の調査、天窓を含んだ閲覧室の屋根の修復設計、調査と実測、そして修復に携わる労働者の技能向上と教育プログラムが提供された。多くの場合、工事別に違った団体から資金が提供される。

Arkkitehti 誌はこのヴィープリ市立図書館に対して大きな関心を抱いており、事業の開始当時から多くの記事を掲載した。

実際の工事は 1995 年より始まり、少しずつ修復が行われている。現在ではこの図書館のシンボルともいえる、閲覧室の天窓の修理が完了し、5 月から 10 月までは電気による照明がいらぬほどだという。

そこで、2003 年までに完了した修復事業を以下に示す。(アールト財団より提供された資料に基づく)。

①大ガラス壁 1995 年

大ガラス壁はこの建築の主要な建築の特徴の一つであり、修復計画の象徴ともされた。当初のスチール枠・真鍮のヒンジが保存された他、1950 年代の修復で導入されたスチール窓・建具、木枠が撤去された。当初のジョイントは前回の修復で撤去されたが、修復された。この工事の資金は Action Viipuri Switzerland とフィンランド環境省より提供された。

②講義室天井 1998 年-

講義室の波型の天井は図書館の最も興味深い建築要素の一つである。当初の天井は戦後破壊され、1950 年代の修復では古い写真と壁の側面の痕跡によって再建された。この際の使用された木材が貧弱であったため、再修復が検討されていた。2000 年の秋に、フィンランドで当初の天井の模型が発見され、これに従って再建が計画された。工事は現在も進行中で、個人や団体などで、天井の木材を寄付することができる。

③屋根 1999-2003 年

図書館はすべて陸屋根である。オリジナルの構造はコンクリートスラブに断熱材とモルタル仕上げであった。雨水は内部のパイプを通り底近くの排水溝から出される。

この事業はいくつかの段階に分けられ、最初の修復は講義室棟の屋根であった。講義室棟の屋根は当初、スチール手すり付きのテラスとして機能していた。1950 年代の修復ではモルタルと断熱材が除去され、新しい断熱材とアスファルトの層が重ねられ、手すりの補強のためレンガが追加されていた。

腐食したアスファルトと断熱材の層は除去、当初の内部の雨水パイプは洗浄され、新しい耐酸のスチールパイプが導入された。当初の屋根スラブの勾配が改善され、防水層とプラスチックの断熱材が耐霜のために用いられ、底は銅板で覆われた。スチール手すりは屋根のその他部分の修理の終了後に再設置される。講義室の屋根の修復はフィンランド環境省・教育省、そしてイタリアの Comitato Italiano Aalto Viipuri、およびゲティー財団補助金事業からの資金提供による。

貸出閲覧室の屋根は、アールトの建築の中で初めて多くの天窓を自然採光の手段として用いた部分である。図書館には全てで 58 の天窓がある。当初の天窓は鋳型ガラスによる仕組みであったが、1950 年代の修復ではプラスチックに変更された。屋根の修復は講義室棟と同様の手法を用いて行われた。2001-2003 年の修復は天窓

の当初の形態への再建も目的としている。しかし、近代的なガラスが当初の荒い鋳型ガラスの代わりに使用され、新しい窓枠が天窓に熱効率の向上のため導入された。この修復は、Robert Wilson Challenge to Conserve Our Heritage からの資金提供で行われた。

④雑誌室の入口ドア 2000-2001 年

雑誌室の入口ドアは唯一残存しているオリジナルのドアだが、真鍮と木のハンドル部分は失われている。ドアは錆びて腐食し、使用されていなかったが、可能な限り真正的に保存された。フレーム下部は改修されるが、当初の蝶番二つは保存される。ハンドルは当初のデザイン、古い写真、そしてパイミオ結核療養所に使われたハンドルと比較して修復された。この事業はレニングラード州文化委員会からの財源によった。

⑤貸出室ホールのテラスの階段 2001 年

この階段は当初、プレハブの鉄筋コンクリートの片持ち梁により構成されていたが、コンクリートは腐食し、内部の鉄筋が錆び、耐荷重能力は失われた。修復において、炭酸塩化したコンクリートと腐食した鉄筋は取り除かれ、新しい補強とコンクリートが打たれた。一段は完全に、何段かは部分的な保存がされた。まったく錆びた当初のスチール手すりは当初の形態に従った新しいものと交換された。この修復は The Foundation for Swedish Culture in Finland からの財源によった。

⑥講義室の窓 2001-2003 年

前回の修理で講義室の窓の高さは、20 センチほど引き下げられた。コンクリート梁の高さは三つのレンガの高さ分増加し、当初のスチール枠の垂直要素は切除され、隅は漆喰が塗られた。庇も高くされたため北立面の比例は完全に変更された。今回の工事で窓の下で荷重を受けるコンクリート梁は当初の高さに修復され、隅の細部は再建された。錆びたスチール枠を更新することが必要であった。換気口の網は当初の写真を基に再建された。当初の手すりの高さが戻り、現在北立面は当初の優雅な比例を再獲得した。

この修復工事はロシア文化省と、レニングラード州文化委員会からの財源による。

以上あげたものの他、この修復のためのフィンランド＝ロシア委員会は2000年以降から2010年にかけての修復事業計画が発表されている。2006年に講義室と、表面下の排水口、地下水と地表の水の井戸や、公園の周囲環境の測量が計画されている。2007年は子供図書館の窓、入り口ホール、カフェ、そして外壁、主玄関と正面ドアの石造部分、電気設備及び換気が計画されている。2008年には閲覧室の内装、地下の書庫、2009年には、貸し出しホールの内装、事務所の階段とガラスの壁、2010年には、子供図書館と西の階段、そして事務所の部屋と廊下が予定されている。

ヴィープリ市立図書館はロシア政府によって1995年に“federal monuments”に登録された。また、UIAは第88回の評議会において、勧告としてこの図書館を世界遺産リストに登録されるべきと決議している。

6. アールトと世界遺産

アールトの初期代表作のパイミオ結核療養所は世界遺産の暫定リストに掲載されたものの、2007年の世界遺産委員会では登録に至らなかった。

登録のためのクライテリアは(i)(ii)(iv)^{注34)}で申請され、それぞれパイミオ結核療養所の機能主義的側面、すなわちアールトによる生理学、心理学、社会学に基づき、患者が最も回復に近づけるような動線や空間構成、そしてそれらが組み合わさって純粋な機能主義の見本としての価値があること、そしてこの結核療養所により、機能主義がフィンランドだけではなく北欧諸国にも爆発的に広まったことが強調された。

しかしながら、ICOMOSによる評価はパイミオ結核療養所に対し、単体ではなく、アールトの遺産すべてに対して世界文化遺産への登録を推奨するとともに、価値付けを機能主義ではなく、結核療養所と病院の形式における重要性を重視するべきであるとした。ICOMOSは今後、より充実した保存管理計画の策定を求め、2007年の世界遺産委員会ではアールト遺産を世界文化遺産リストへの登録を延期することを決定した。

7. 結

フィンランドにおいて、二十世紀建築遺産は現在重要な遺産の一分野として確立している。

その中でも本論では特にアルヴァ・アールトの遺産に注目して述べたが、アールトが世界的な名声を有した建築家であり、その作品の価値評価は比較的早い段階からなされ、遺産として扱われてきたことがわかった。

また、アールトが生前に設立した財団の役割は明確であり、彼の遺産保護に関する監修者としての役割は非常に有効である。

Arkkittehti誌は、アールトの存命中から彼の作品に対して歴史的な価値を有するものとして保存を訴えたり、進行中あるいは終了した復事業に関する記事を掲載したりするなど、一部の遺産の修復・保護に対しては関心が高いと言える。

フィンランドシアホールの修復に関する一連の議論では、二十世紀建築遺産がただの市の施設から、記念物へと扱いが変化し、それとともに、真正性を保つ当初の材料による修復となる動きを見ることができる。これらの材料をめぐる論争は、今後、二十世紀建築遺産の修復において参照事例となると考えられる。

アールトはフィンランドにとって非常に重要な記念碑的存在の建築家である。アールト建築遺産に対するフィンランドの姿勢が、国内における活動に留まらず、ヴィープリ市立図書館のプロジェクトなど国際的な事業にまで発展している。ヴィープリ市立図書館のような事例は、グローバル化が進行した二十世紀の建築遺産において、遺産としての多様性、そして保護・修復に関する今後の可能性を提示している上で、非常に有益である。

謝辞

当時アールト財団の建築家であられた Hanni Sipponen 女史には、2007年夏にインタビューや資料提供など、多大なご協力をいただいた。末尾ながら感謝を申し上げる。

注

注1)本論文において使用する「二十世紀建築遺産」の定義は、欧州評議会における1983年の「二十世紀建築遺産保護に関する勧告」の附則に準拠するものである。この欧州評議会の勧告が示す、「二十世紀建築遺産」とは、建築年代の新しい、二十世紀の建築の保をより推進するため、特定の様式や

スタイル、建築家集団、機能等に固定せずに、有名なものだけではなく、無名でありふれたものまで、この時代の総合的な建築遺産をさす。建築年代として二十世紀初頭より 1970 年代にかけてとする。また、この語は欧州評議会だけではなく ICOMOS などにおいても使用されている。

注 2) Council of Europe, Recommendation No. R 91)13 of the Committee of Ministers to Member States on the Protection of the Twentieth-Century Architectural Heritage

注 3) 1994 年第 18 回世界遺産委員会 プレーケット) において採択。
http://whc.unesco.org/en/globalstrategy (参照 2008-12-27)

注 4) ヨーラン・シルツ著 田中雅美, 田中智子共訳: 白い机 若い時—アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想, 鹿島出版会, 1989 年 100pp.

注 5) Rakennusperintöstrategia valtioneuvoston päätös 13.6.2001
建造物遺産政策 内閣承認 2001 年 6 月 13 日)

注 6) ibid, § 2 Rakennusperintömmä

注 7) ibid, § 2 Rakennusperintömmä

注 8) ibid, § 2 Rakennusperintömmä

注 9) ibid, § 2 Rakennusperintömmä

注 10) アールト財団に対するインタビューより。

注 11) アールト財団に対するインタビューより。

注 12) アールト財団に対するインタビューより。

注 13) Fondation Le Coubusier
1968 年に設立されたル=コルビュジェの業績を散逸させないため、図面等の管理を行い、展示などの管理、修復の際の助言を行っている財団。

注 14) Fundatió Mies van der Rohe
1983 年にスペイン、バルセロナ市に建築家ミース・ファン・デル・ローエによる 1929 年のバルセロナ万博におけるドイツ館を再建することを目的として設立された財団。

注 15) The international confederation of architectural museums
国際建築博物館連合 建築に関する博物館の国際的な連携を目的とする団体。

注 16) International Council of Museums 国際的なレベルで、博物館および博物館専門職のプロモーションと発展につとめる団体。

注 17) Arkkitehti - Finnish architectural review
Helsinki : Suomen Arkkitehtiliitto - Finland Arkitektförbundet
フィンランド建築家協会が 1903 年より発行している建築雑誌。以下の注では Ark と表記する。

注 18) 1952 年—2004 年の範囲が現在日本の大学で開架でかつ総合的に閲覧できる建築雑誌 Arkkitehti 誌の限度である。

注 19) Moholy-Nagy, Sibyl: Modernin arkkitehtuurin vanhenminen ,Ark, No. 7-8. 1967.

注 20) Kairamo, Maija: Restauroimisen periaatteista, Ark, No. 3, 1971.
Norri, Maima: Kuinka Kay paimion parantolan?, Ark, No. 7, 1977.

注 21) Kairamo, Maija: Tuhoammeko Alvar Aallon perinnön?, Ark, No. 2, 1979.

注 22) ed.: Villa Mairea tänään, Noormarkku, Ark, No. 3, 1983,

注 23) Saari, Touko : Etelä- Pohjanmaan maakuntasäätiön talo. Etelä-Pohjanmaan suojeluskuntapiirin talon entistäminen ja peruskorjaus, Seinäjoki, Ark, No. 4, 1986,

注 24) ヨーラン・シルツ Göran Schildt 1917 年 -) アルヴァ・アールトの友人で批評家、美術史家。彼の確定的な伝記、『白い机』全三巻を著した。

注 25) ed.: Viipurin kirjaston restaurointi, Ark, No. 4, 1991,

注 26) Kairamo, Maija: Kahden Kansan kirjasto, Ark, No. 5, 2003.
Heikinheimo, Marianna: Viipurin kirjasto- maailman edistyskellisin kaupunginkirjasto, Ark, No. 5, 1998.
Neuvonen, Pentti: Viipurin rakennusperintö tänään, Ark, No. 2, 2000,

注 27) Kairamo, Maija & Sipponen, Hanni: , Ark, No. 5, 2001,

注 28) Rakennussuojelulaki 建造物保存法 1985 年施行

注 29) Valtion ominaisuus rakennuksen suojelulaki 公有の建造物に対する保存の規定 1985 年施行

注 30) エリサ・アールト Elissa Aalto 1922 年-1994 年) アルヴァ・アールトの妻。建築家でもあり、アールトの死後、事務所を支えた。

注 31) Eeva-Kaarina Holopainen, Pertti Mustonen , Pekka Suhonen: “Finlandia Hall meetings and Music” OTAVA; 2001

注 32) この図書館が位置しているヴィープリは、元々フィンランド領で、中世からの歴史を有する都市であった。それが冬戦争 1939-41)の結果、モスクワ講和条約によるフィンランド領土一部譲渡が決定した際に、ソヴィエト連邦に編入された都市で、現在はロシア連邦レニングラード州下にある

注 33) ヴィープリ図書館は、最初の芬露戦で損傷を受け、続く戦闘でほとんど破壊されてしまった、という記述がある。 S. ギーディオーン 太田實訳: 新版 空間時間建築 2, 丸善, 1977)

注 34) 世界遺産作業指針 Operational Guidelines for the Implementation of the World Heritage Convention, WHC. 08/01 January 2008 II. D Art. 77
i) represent a master piece of human creative genius 人類の創造的才能を現す傑作である。
ii) exhibit an important interchange of human values, over a span of time or within a cultural area of the world ,on developments in architecture or technology, monumental arts, town-planning or landscape design.
建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流またはある文化圏内での価値観の交流を示すものである。
iv) be an outstanding example of a type of building ,architectural or technological ensemble or landscape which illustrates a significant stage in human history
歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。

参考文献

- 1) WORLD HERITAGE COMMITTEE; 31st Session: Item 8B of the Provisional Agenda: Nominations to the World Heritage List: Christchurch, New Zealand; 23 June - 2 July 2007
- 2) ヨーラン・シルツ著/田中雅美, 田中智子共訳: 白い机 若い時—アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想, 鹿島出版会, 1989
id.; 白い机 モダン・タイムス—アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い, 鹿島出版会, 1993
id.; 白い机 円熟期—アルヴァ・アアルトの栄光と憂うつ, 鹿島出版会, 1998 武藤章訳: アルヴァ・アアルト, 鹿島出版会, 1972
- 3) *FINLEX フィンランド法律データベース)
http://www.finlex.fi/ (参照 2008-12-27)
- 4) Eeva-Kaarina Holopainen, Pertti Mustonen , Pekka Suhonen : Finlandia Hall meetings and Music ; OTAVA; 2001
ed. Maija Kairamo, Ulla Kinnunen, Esa Laaksonen, Timo Tuomi: Modernismin merkkiteoksia suomen arkkitehtuurissa: Art-Print Oy; 2002
- 5) ヴィープリ市立図書館修復のためのフィンランド＝ロシア委員会
http://www.arvaraalto.fi/viipuri (参照 2008-12-27)

(2008年11月10日原稿受理, 2009年1月26日採用決定)